

第1章

水戸市の概要



ダイダラボウ像 大串貝塚ふれあい公園のシンボルです。



第1章

水戸市の概要

第1章では、本市の自然的・地理的環境、社会的環境、そして本市の歴史的背景について説明します。

1 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は、東京から約100キロメートルの距離にあり、関東平野の北東端に位置する茨城県の県庁所在地です。市域の北側は那珂川を隔てて、ひたちなか市や那珂市に接しており、東側は太平洋に面する大洗町に、南側は茨城町に、西側は笠間市、城里町に接しています。市域面積は217.32平方キロメートルです。

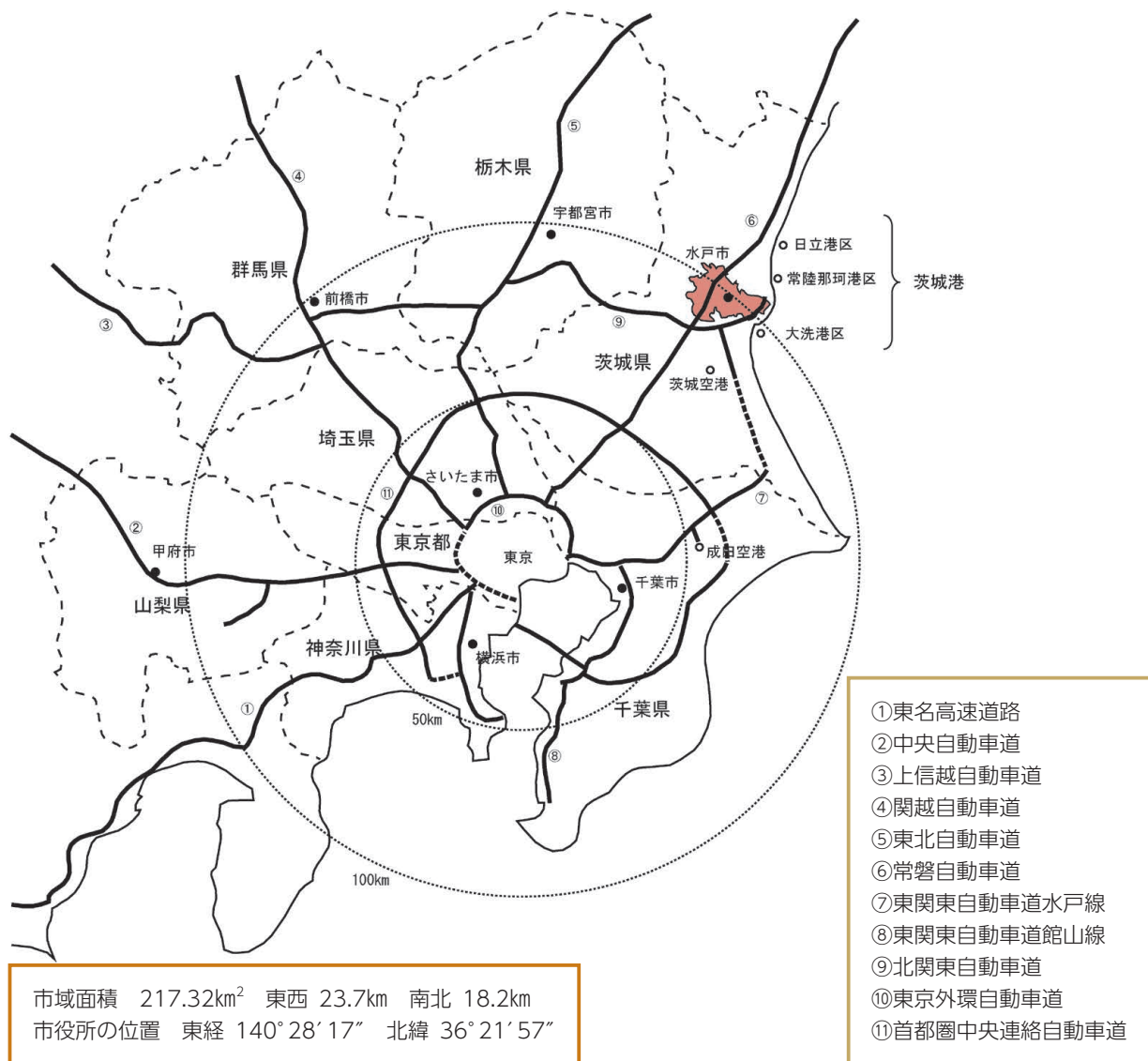


図1-1 水戸市の位置(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)



(2) 地形・地質

水戸の地質は、西から①鶏足山塊、②丘陵地、③台地、④低地の4種類に大別されます。

① 鶏足山塊

①の鶏足山塊は、中生代ジュラ紀（約2億100万～1億4,500万年前）の付加体¹です。木葉下町周辺は鶏足山塊の縁に当たり、頁岩や砂岩で構成されています。岩体は地下深くに潜り込み、水戸の基盤層の一つとなっています。正確な深度は明らかではありませんが、中心市街地の地下数百メートルに岩体が存在していると考えられます。

② 丘陵地・③ 台地

鶏足山塊の岩体上に堆積し、②の丘陵地と③の台地を形成しているのが、もう一つの水戸の基盤層「水戸層」です。水戸層は新第三紀前～中期の中新世（約2,303万～533万3,000年前）に形成されました。石質は凝灰質泥岩といい、海底の泥が堆積してできたものです。海底の分厚い泥の堆積は、厚さ数百メートルに及ぶ水戸層を形成しました。

水戸層の上には、第四紀（258万8,000年前～現在）に形成された表層（見和層、上市礫層、関東ローム層）が堆積しています。見和層と上市礫層は、水戸層同様に海や川的作用によって形成されたもので、水戸付近が海進と海退を繰り返していたことが分かります。

関東ローム層は、男体山・赤城山・榛名山・浅間山・富士山・箱根山等から噴火した火山灰が約13万5,000年～1万2,000年前にかけて降り積もって堆積したもので、市内の台地上に広く堆積しています。層厚は4～6メートル程度が一般的で、下部は茨城粘土層と呼ばれる粘土層になっています。

④ 低地

台地下に広がる④の低地は、那珂川下流域を中心に広がる沖積低地です。

約13～12万年前、下末古海進と呼ばれる海面上昇が起こり、関東地方は古東京湾という巨大な湾ができました。水戸はラグーン²となり、浅く穏やかな海が広がる景観だったと考えられます。しかし、約2万年前の最終氷期最盛期の到来によって海岸線が現在より約120メートルも低くなり、強い侵食作用によって現在的那珂川流域を中心に深い谷となりました。その後海水面が上昇して土砂がたまり、広大な沖積低地が形成されました。

約7,000年前～5,470年前の縄文時代前期には、海水面が現在より3メートルほど上昇し（縄文海進）、千波湖辺りまで海が浸入しました。千波湖南岸にある柳崎貝塚や元吉田町にある吉田貝塚はその頃にできた貝塚です。その後の海退により、水戸周辺はほぼ現在と同様の地形になりました。

¹付加体：海洋プレートの表面にできた岩石や地層がはがされ、陸地のプレートの先端に付加されたもの。

²ラグーン：海の一部が、砂洲等によって外海と遮断されてできた湖沼のこと。

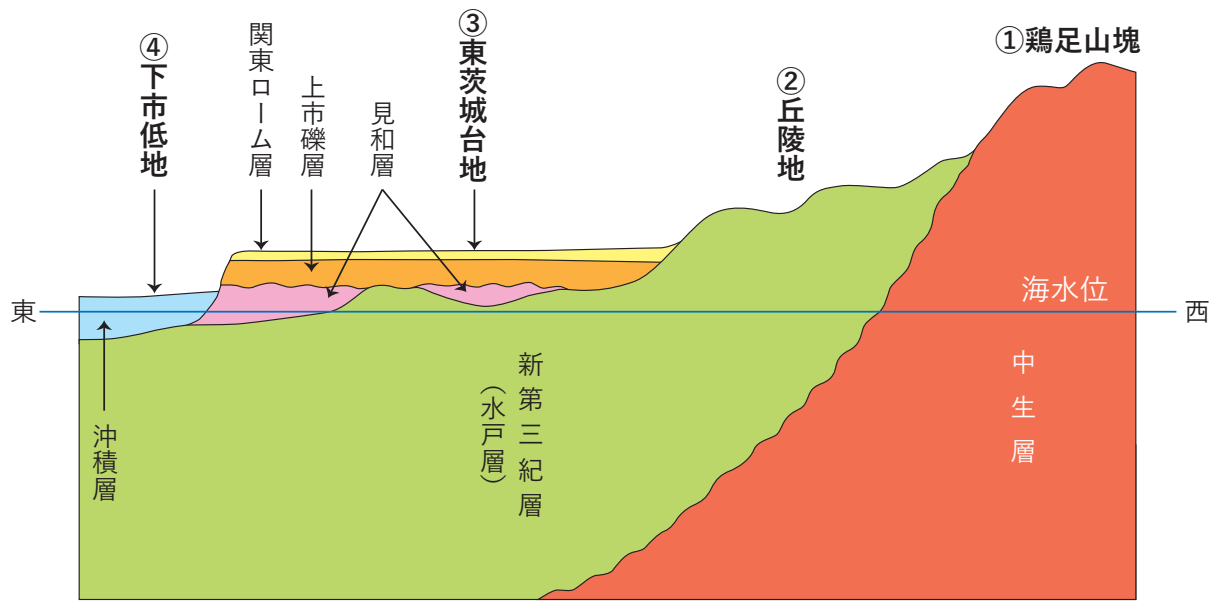


図1-2 水戸周辺の模式地質断面図 (出典:『水戸の大地の成り立ち』水戸市立博物館発行、2020年)

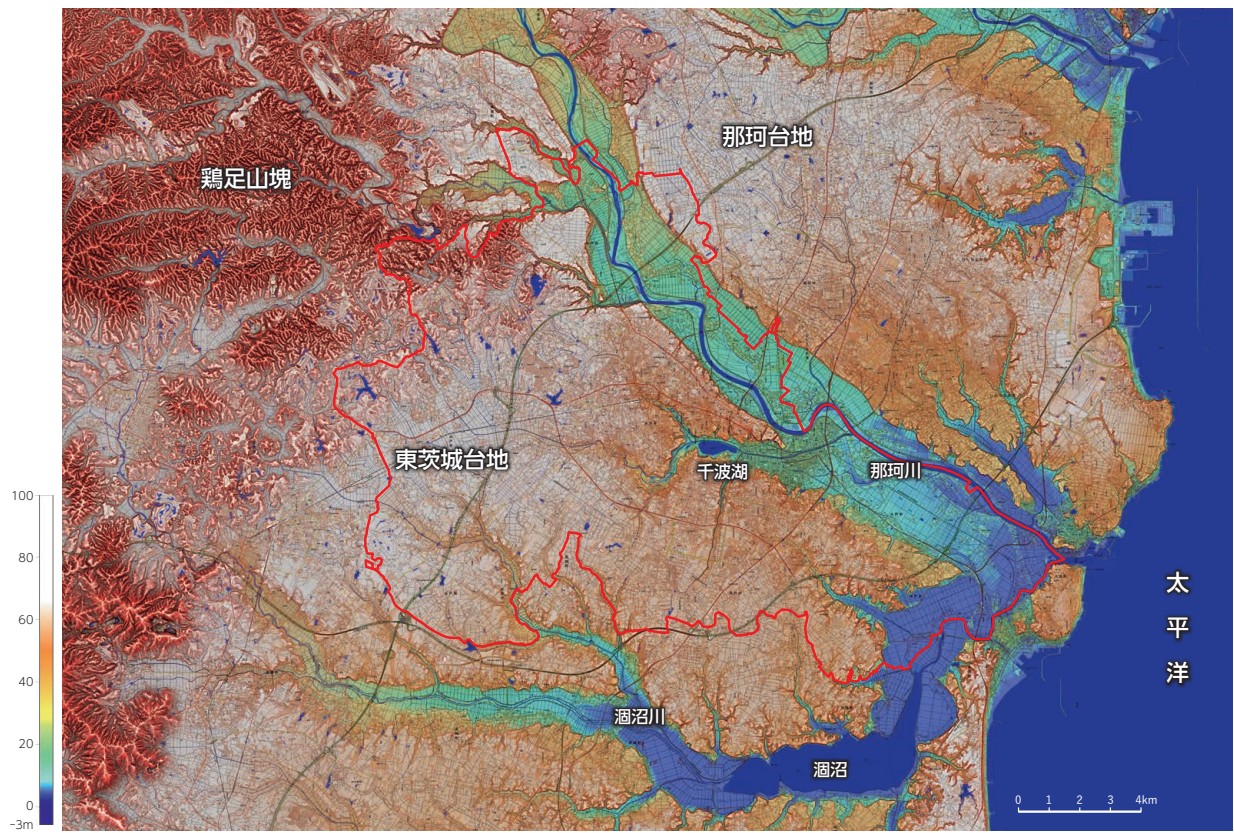


図1-3 水戸周辺の赤色立体図 (出典:『水戸の大地の成り立ち』水戸市立博物館発行、2020年／制作:アジア航測株式会社)
赤色立体図は、赤色を基調とした色の濃淡で、標高の違いにメリハリをつけ、立体的に分かりやすく表現した地図です。西側の濃く赤い部分が丘陵地(鶏足山塊の外縁部)です。中央の白～茶色にかけての部分が台地(東茨城台地、那珂台地)、青い部分が沖積低地(那珂川、千波湖、澗沼川、澗沼周辺)です。図中の赤線が水戸市域です。



(3) 気候

① 概況

太平洋岸式気候に含まれる関東気候区の北東部に位置する本市では、2月になると梅の花が咲き始め、春の気配が感じられるようになり、3月中旬から本格的な春を迎えます。この時期に毎年「梅まつり」が開催されています。

4月上旬には桜が開花し、5月上旬には日中の気温も20℃を超えて初夏の候に入ります。

6月から7月にかけては梅雨の季節となり、梅雨明けの7月下旬から8月末までは北太平洋の高気圧におおわれて盛夏となります。

秋は台風が来襲することもあります、本県を通過するころには勢力が弱まっている傾向があります。しかし、大雨が続いて那珂川や中小河川が氾濫することもあります。

10月から11月にかけては、大陸から移動性高気圧が周期的にやってきて晴天をもたらすとともに次第に寒くなり、初霜、初氷をみるようになります。その後、北西の季節風が本格化するようになり、市内の千波湖や大塚池には、シベリア地方から白鳥が飛来します。

本市の厳寒期は1月中・下旬で、最低気温は平均では-2℃くらいですが、年によっては-8℃くらいまで下がることもあり、凍結により水道が被害を受けることもあります。また、

年 別						年 別					
	気 温 (℃)			平均湿度 (%)	降水量 (mm)		気 温 (℃)			平均湿度 (%)	降水量 (mm)
	平 均	最高値	最低値				平 均	最高値	最低値		
平 年 値	14.1			74	1,367.7	2002年	14.0	36.6	-5.8	72	1,180.0
1981年	12.3	33.2	-8.0	75	1,217.0	2003年	13.3	34.6	-7.1	74	1,439.0
1982年	13.4	33.0	-8.5	76	1,445.0	2004年	14.4	36.4	-5.3	72	1,406.5
1983年	12.8	34.6	-8.0	75	1,299.5	2005年	13.4	35.6	-6.5	72	1,147.0
1984年	12.1	35.9	-11.0	74	760.5	2006年	13.9	35.1	-7.7	74	1,671.5
1985年	13.3	34.7	-10.6	75	1,464.0	2007年	14.4	37.0	-4.4	72	1,367.0
1986年	12.5	34.5	-8.5	75	1,294.5	2008年	13.9	35.2	-5.5	73	1,181.0
1987年	13.6	35.8	-6.5	75	1,148.5	2009年	14.2	34.2	-5.4	72	1,461.0
1988年	12.8	33.0	-6.5	73	1,446.5	2010年	14.5	36.1	-6.5	73	1,530.5
1989年	13.9	34.9	-5.9	75	1,683.5	2011年	14.1	36.5	-7.2	72	1,498.5
1990年	14.6	35.2	-7.6	75	1,490.5	2012年	13.9	36.3	-7.1	74	1,485.5
1991年	14.0	34.7	-6.0	75	1,948.0	2013年	14.3	36.3	-6.7	72	1,338.0
1992年	13.5	35.2	-5.6	76	1,327.5	2014年	14.2	36.2	-7.8	72	1,471.0
1993年	12.9	33.7	-5.7	77	1,393.5	2015年	14.8	36.5	-4.6	74	1,226.5
1994年	14.3	36.4	-6.1	76	1,236.5	2016年	14.8	36.9	-4.8	74	1,426.0
1995年	13.6	35.7	-7.0	74	1,254.0	2017年	14.2	35.7	-6.2	71	1,126.5
1996年	13.0	38.4	-8.9	73	1,162.5	2018年	15.3	37.6	-7.9	72	1,282.5
1997年	14.0	38.4	-6.0	75	1,073.5	2019年	14.9	36.3	-5.8	71	1,391.0
1998年	14.1	33.6	-6.1	82	1,663.5	2020年	15.0	37.6	-6.3	74	1,422.0
1999年	14.5	35.4	-6.8	73	1,272.0	2021年	15.0	37.4	-6.8	70	1,661.0
2000年	14.2	36.8	-6.6	74	1,400.0	2022年	14.8	37.1	-5.9	70	1,202.5
2001年	13.7	36.2	-7.4	72	1,243.5	2023年	16.1	37.5	-6.0	73	1,507.5

表1-1 水戸市の気象概況(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)



雪は12月末から3月にかけて、低気圧が日本の南岸を発達しながら通過するときに降ることがありますが、積雪はあまり多くありません。

② 気候変動の状況

本市の年平均気温は、年ごとの変動はあるものの、この100年間で約1.5℃上昇しており、日本の年平均気温の上昇（約1.2℃／100年）より高い状況となっています。真夏日、猛暑日及び熱帯夜の日数は増加傾向に、冬日日数は減少傾向にあります。

年降水量は、この100年間で約150ミリメートルの減少が観測され、無降水日数（日降水量1ミリメートル未満）は、100年当たりで約14日増加しています。

一方、1時間降水量50ミリメートル以上の県内の発生回数は増えており、局地的豪雨が頻発するようになっていくことが考えられます。

2 社会的状況

(1) 人口動態

本市の人口は、2025（令和7）年7月1日現在で推計●人となっており（2020年国勢調査確定値基準）、人口規模は県内第1位です。

1975（昭和50）年以降、生産年齢人口（15～64歳）の増加と団塊ジュニア世代（1971（昭和46）～1974（昭和49）年生まれ）の誕生による年少人口（0～14歳）の増加、さらに、1992（平成4）年の常澄村、2005（平成17）年の内原町との合併等により、2015（平成27）年には270,783人に達しましたが、近年の人口は微減となっています。

年齢別人口の推移については、1990（平成2）年から2020（令和2）年までの30年間で、年少人口が11,786人、構成比が19.4パーセントから12.8パーセントへと大幅に減少した反面、高齢者人口（65歳以上）は46,621人、構成比が10.3パーセントから27.0パーセントへと増加し続けており、少子化及び高齢化が更に進行しています。

人口集中地区（DID）の推移については、昭和40～50年代は、人口の急増に対応した人口集中地区の拡大が見られましたが、現在は、人口集中地区の大きな変化はない状況です。一方で、地区内の人口密度が減少傾向にあること等から、緩やかなドーナツ化現象が続いているものと考えられます。

昼間人口の推移については、本市は通勤や通学によって昼間に流入する人口が多く、昼夜間人口比率（昼間人口／夜間人口）は、1975（昭和50）年以降115パーセント前後となっています。これは、周辺の他市町村と比較し、極めて高い比率となっており、本市を中心とする地方中核都市圏における拠点性、中枢性の高さを示しています。

地区別人口の状況については、市域の周辺地域等において、人口の減少傾向が見られる反面、南部を中心とした地域で増加傾向にあります。

本市の将来人口は、約10年で約7,400人の減少が予測されています。こうした中、本市は若い世代から選ばれる都市づくりを目指し、安心して子育てできる環境整備や創業支援、多様な雇用創出等に取り組み、人口流入の促進、人口流出の抑制を図ります。



各年10月1日現在(単位:人、%)

区 分	人 口							
	総 数	年 齢 別 人 口						増加率
		年少人口 (0～14歳)	構成比	生産年齢人口 (15～64歳)	構成比	高齢者人口 (65歳以上)	構成比	
1975年	197,953	51,086	25.8	132,988	67.2	13,753	6.9	13.9
1980年	215,566	54,190	25.1	144,246	66.9	16,885	7.8	8.9
1985年	228,985	52,265	22.8	156,547	68.4	19,971	8.7	6.2
1990年	234,968	45,471	19.4	163,764	69.7	24,301	10.3	2.6
1995年	246,347	41,878	17.0	171,231	69.5	32,372	13.1	4.8
2000年	246,739	38,317	15.5	168,589	68.3	39,359	16.0	0.2
2005年	262,603	38,118	14.5	174,321	66.4	49,935	19.0	0.4
2010年	268,750	37,340	14.1	169,886	64.1	57,793	21.8	2.3
2015年	270,783	34,839	13.2	163,039	61.7	66,236	25.1	0.8
2020年	270,685	33,685	12.8	158,472	60.2	70,922	27.0	△0.0

注1 増加率は、対前回調査と比較した率を示す。 注2 総数は年齢不詳を含む。

表1-2 国勢調査人口の推移(出典:国勢調査、総務省統計局)

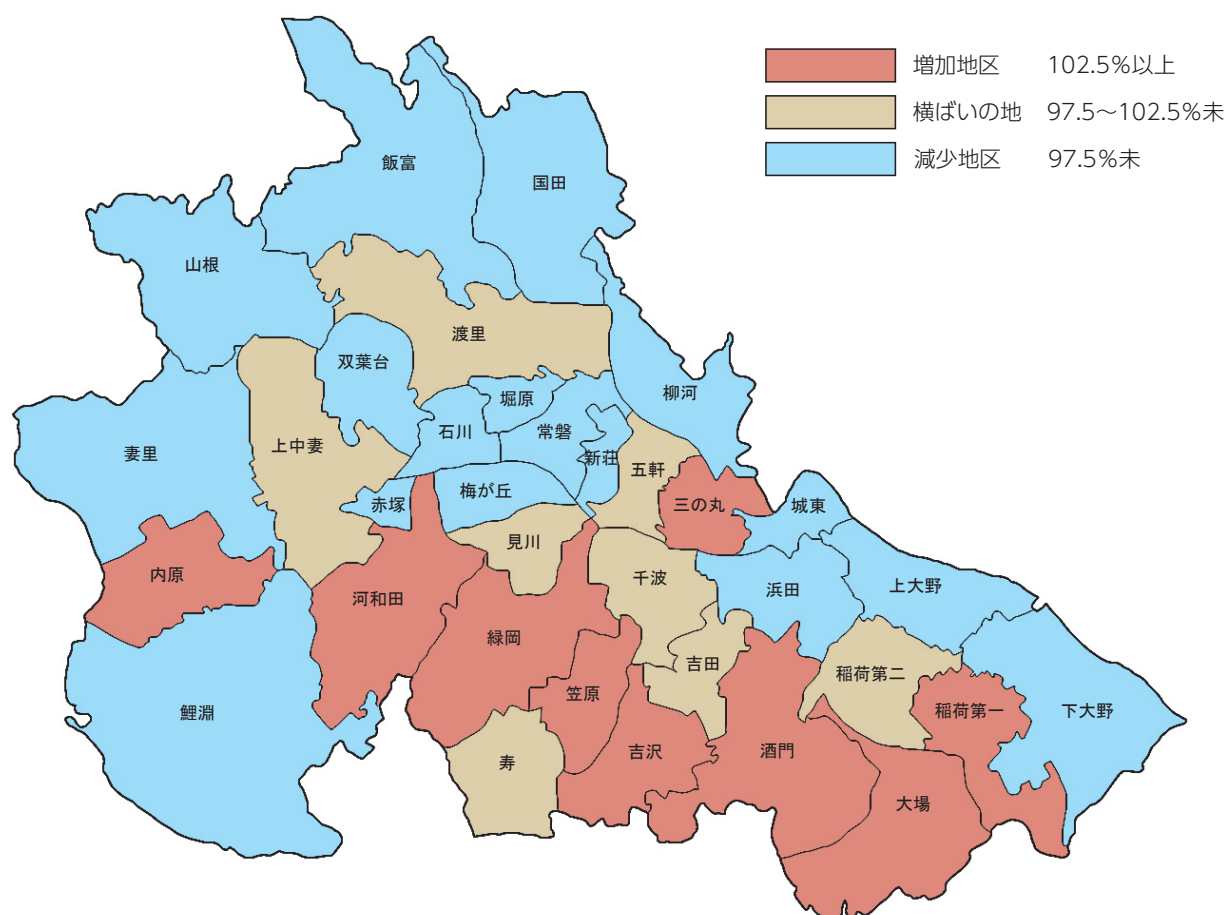


図1-4 地区(小学校区)別人口の動態(双葉台地区は旧双葉台地区と旧山根地区に分けて表記)
(2015年～2020年人口変化率/出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)

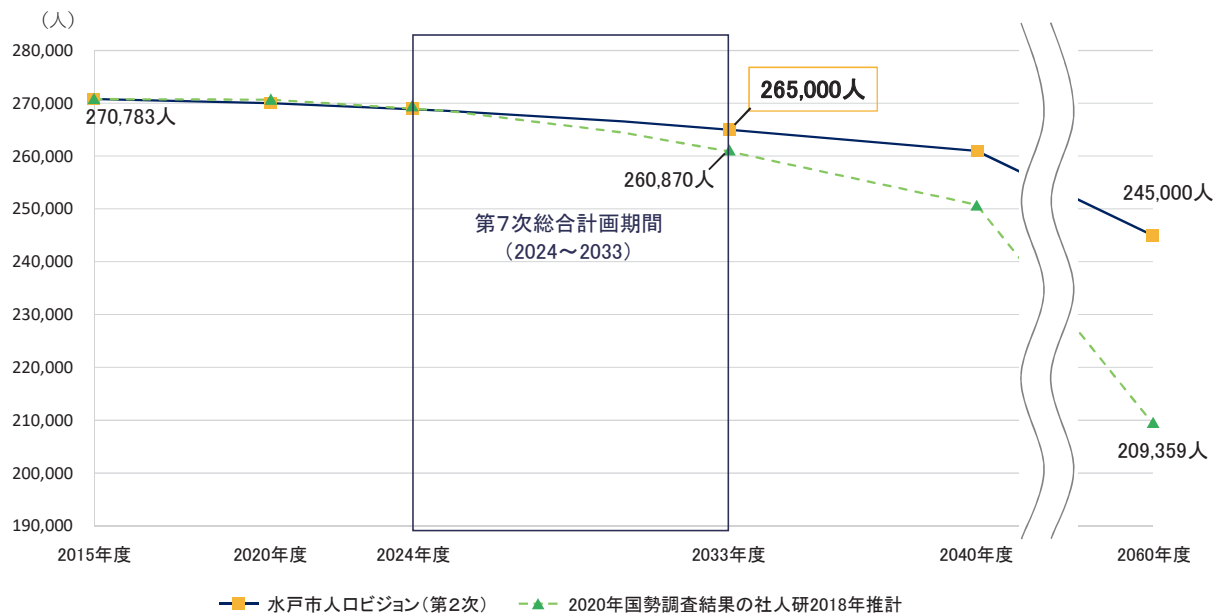


図1-5 目標人口と国の人口推計(出典:『水戸市第7次総合計画－みと魁・Nextプラン－』水戸市発行、2024年)

そして2033（令和15）年度の目標人口を265,000人に、2060（令和42）年度の目標人口を245,000人に定め、人口に占める年齢3区分別人口の割合として、年少人口13.2パーセント、生産年齢人口57.8パーセント、高齢者人口29.0パーセントを見込んでいます。世帯数は129,800世帯で、一世帯当たりの人員は2.04人を見込んでいます。

(2) 土地利用

本市の土地利用の状況は、2025（令和7）年1月1日現在において、農地と山林原野あわせ●ヘクタールと全体の約●パーセントを占め、比較的緑の多い都市であることがうかがえます。2005（平成17）年の内原町との合併により、農地・山林原野面積は大きく増加したものの、土地利用の推移を見ると、農地は減少傾向にあり、宅地化や耕作放棄による荒地化が進んでいると考えられます。

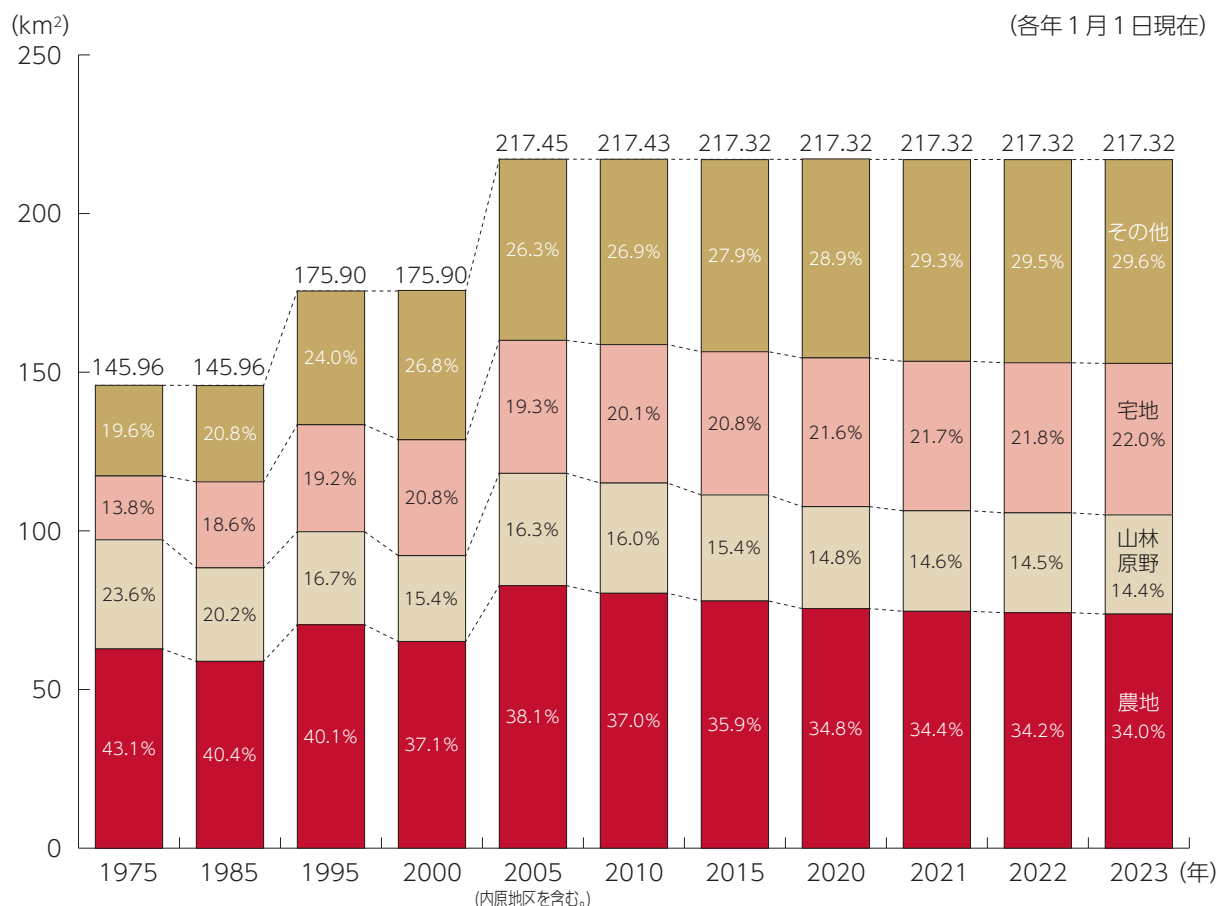


図1-6 土地利用状況(出典:『令和7年版 水戸市の概要』水戸市発行、2025年)※現在の表は令和6年版。後日更新

(3) 交通

本市を貫通する幹線道路について、高速交通網では、南北に常磐自動車道（埼玉県三郷市～宮城県亘理町）が縦断します。また、東部では北関東自動車道（本市～群馬県高崎市）とそれに接続する東水戸道路（本市～茨城県ひたちなか市）が横断しています。

国道では、関東と東北地方を結ぶ道として、国道6号（東京都中央区～宮城県仙台市）があります。国道6号は江戸時代の岩城相馬道及び水戸街道と大部分が一致します。また、国道118号（本市～福島県会津若松市）と国道349号（本市～宮城県柴田町）が走ります。関東地方の他の主要都市を結ぶ道としては、国道50号（本市～群馬県前橋市）、国道51号（本市～千葉県千葉市）、国道123号（本市～栃木県宇都宮市）があり、いずれも本市が起点となっています。

鉄道では、市街地中央に位置する水戸駅は、JR常磐線（東京都荒川区～宮城県岩沼市）の主要駅の一つであり、JR水郡線（本市～福島県郡山市）、水戸線（茨城県笠間市～栃木県小山市。一部水戸駅直通）及び鹿島臨海鉄道大洗鹿島線（本市～茨城県鹿嶋市）のターミナルとなっています。

このように、本市は東北地方と関東地方を結ぶ結節点であるとともに、関東地方の他の主要都市への移動も容易である利便性の高い都市と言えます。

本市の路線バスネットワークの状況については、バス事業者3社により、水戸駅を中心として主に県庁方面や赤塚駅方面、さらには市外へ、公共施設や教育施設、病院等の医療施設を結ぶ形





で、放射状にネットワークが形成されており、特に鉄道駅やバス営業所をつなぐ路線の運行本数が多くなっています。

水戸駅北口から大工町交差点までの国道50号線は、市内交通の大動脈となっており、1日当たり約1,500本の路線バスが通行しています。その一方で、中心市街地以外の拠点間を直接結ぶ路線バスの運行本数は少なくなっています。

(4) 産業

本市の産業は、第3次産業の割合が86.8パーセントとその大半を占めています。2013（平成25）年に、情報通信の高度化、経済活動のサービス化の進展、事業経営の多様化に伴う産業構造の変化に適合するよう日本標準産業分類が改訂されましたが、約30年の間でも、産業別の構成比の大きな変化は見られません。業種別には、卸売業・小売業が25.1パーセント、次いで、宿泊業・飲食サービス業11.1パーセント、建設業9.5パーセント、生活関連サービス業・娯楽業9.3パーセントの順となっています。

(単位:所、%)

区 分	1991年 (常澄地区含む)		2001年 (内原地区含む)		区 分	2012年		2021年	
	事業所数	構成比	事業所数	構成比		事業所数	構成比	事業所数	構成比
第 1 次 産 業	11	0.1	14	0.1	第 1 次 産 業	20	0.2	35	0.3
農 林 水 産 業	11	0.1	14	0.1	農 業 、 林 業	19	0.1	35	0.3
					漁 業	1	0.0	—	—
第 2 次 産 業	2,358	15.4	2,281	15.0	第 2 次 産 業	1,835	13.9	1,604	12.9
鉱 業	1	0.0	1	0.0	鉱業、砕石業、砂利採取業	1	0.0	1	0.0
建 設 業	1,472	9.6	1,555	10.3	建 設 業	1,288	9.7	1,177	9.5
製 造 業	885	5.8	725	4.8	製 造 業	546	4.1	426	3.4
第 3 次 産 業	12,937	84.5	12,871	84.9	第 3 次 産 業	11,360	86.0	10,803	86.8
電気・ガス・熱供給・水道業	15	0.1	18	0.1	電気・ガス・熱供給・水道業	20	0.2	28	0.2
運 輸 ・ 通 信 業	284	1.9	311	2.1	情 報 通 信 業	164	1.2	154	1.2
卸 売 、 小 売 業 、 飲 食 店	7,380	48.2	6,665	43.9	運 輸 業 、 郵 便 業	224	1.7	223	1.8
金 融 ・ 保 険 業	348	2.3	374	2.5	卸 売 業 、 小 売 業	3,615	27.4	3,119	25.1
不 動 産 業	640	4.2	766	5.1	金 融 業 、 保 険 業	361	2.7	328	2.6
サ ー ビ ス 業	4,181	27.3	4,648	30.6	不動産業、物品賃貸業	1,008	7.6	955	7.7
公 務	89	0.6	89	0.6	学術研究、専門・技術サービス業	727	5.5	776	6.2
					宿泊業、飲食サービス業	1,630	12.3	1,380	11.1
					生活関連サービス業、娯楽業	1,235	9.3	1,151	9.3
					教育、学習支援業	408	3.1	410	3.3
					医 療 、 福 祉	873	6.6	1,113	8.9
					複 合 サ ー ビ ス 業	45	0.3	50	0.4
					サービス業(他に分類されないもの)	1,050	7.9	1,116	9.0
					公 務	—	—	—	—
合 計	15,306	100.0	15,166	100.0	合 計	13,215	100.0	12,442	100.0

注 1991年については7月1日現在、2001年以降については10月1日現在の数値。

表1-3 事業所数の推移(出典:事業所・企業統計調査、経済センサス、総務省統計局)



(5) 観光

本市の観光入込客数は、2015（平成27）年に日本遺産「近世日本の教育遺産群－学び心・礼節の本源－」に認定され、それに伴う誘致活動が進められるなどの取組を背景に、同年以降、年間360～390万人台で推移していました。

しかし、2019（令和元）年12月に報告された新型コロナウイルス感染症流行の影響により、2020（令和2）年には約143万人まで大幅に減少しました。

また、宿泊者数についても、2019（令和元）年には約62万人、外国人の宿泊者数も約4.2万人を数えるなど、増加傾向で推移していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により2020（令和2）年には宿泊者数が約40万人に、外国人宿泊者数が約5千人にそれぞれ減少しました。

現在は、観光需要喚起策の効果等により、少しずつ回復の兆しが見えているところであり、特に外国人延べ宿泊者数は急増しています。

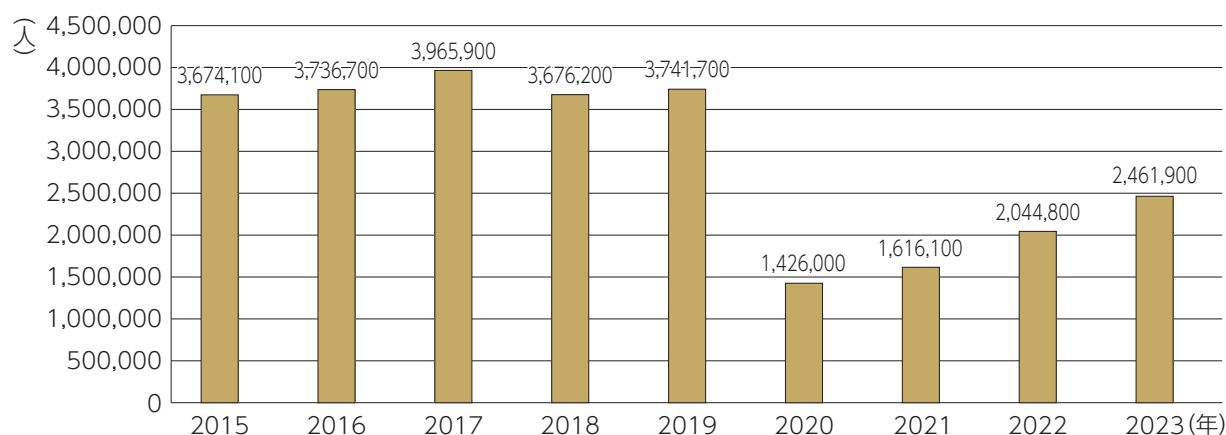


図1-9 入込客数の推移(出典:茨城県 観光客動態調査)

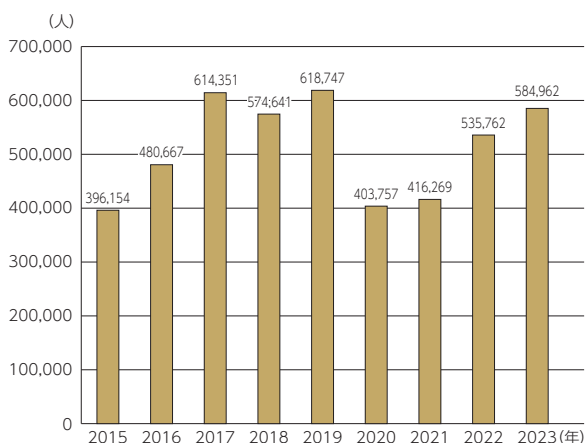


図1-10 宿泊者数の推移
(出典:観光庁 宿泊旅行統計調査)

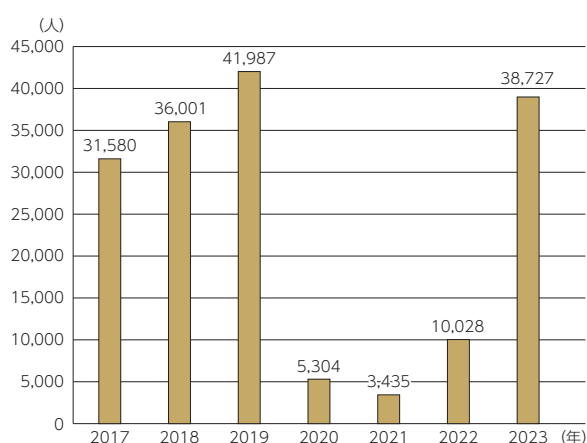


図1-11 外国人宿泊者数の推移
(出典:観光庁 宿泊旅行統計調査)



(6) 博物館

本市は近代以前から政治、産業及び文化の中心地としての歴史性を踏まえ、歴史博物館、資料館、美術館、植物園、歴史公園等の博物館³が多く集積しています。設立主体別では、県立が3施設、市立が11施設（外郭団体を含む。）、私立が6施設あり、合計で20施設を数えます。施設数は県内第1位で、分野も自然、歴史、民俗、美術、考古など、幅広いのが特徴です。

① 県立の博物館

ア 茨城県立歴史館

県立歴史館は、1974（昭和49）年9月に開館した歴史博物館です。茨城の原始、古代から近現代に至る歴史の流れを概観できる常設展をはじめ、特別展及び年数回の企画展を開催しています。また、一橋徳川家記念室でも年数回の展示替えを行っています。偕楽園公園の一部でもある広い庭園には、県指定文化財である旧水海道小学校本館や旧茂木家住宅が移築されています。

イ 茨城県近代美術館

県近代美術館は、1988（昭和63）年10月に開館した美術館です。企画展では国内外の優れた美術作品を展示し、所蔵作品展では4,000点を超える近代美術作品の中から、横山大観など、茨城県ゆかりの作家を中心に展示しています。また、館南側には、本市出身の洋画家である中村彝^{なかむらつね}のアトリエを新築復元し、彝の遺品や資料を公開展示しています。

ウ 弘道館^{こうどうかん}

弘道館は天保12（1841）年8月の仮開館により開設された藩校で、施設そのものが文化財であるとともに、弘道館関連資料を収集、保管、展示及び調査研究を行う博物館でもあります。重要文化財建造物である正庁^{せいちょう}、至善堂^{しぜんどう}や復元建造物である国老詰所^{こくろうつめじょ}内において常設展示しているほか、特別展示や企画展示も年数回開催しています。



茨城県立歴史館（緑町）

県内の歴史資料を収集・展示しています。文書館と博物館の機能を持つ施設です。



茨城県近代美術館（千波町）

茨城ゆかりの作家や国内外の近現代美術作品を収集・展示しています。

³博物館：地域計画では、博物館、資料館、美術館、植物園、歴史公園など、資料の収集、保管、展示、教育、調査研究等を行う施設を「博物館」と定義します。博物館は、博物館法に規定する「登録博物館」及び「博物館指定施設」と、文部科学省社会教育調査上の分類である「博物館類似施設」の三つの分類があり、地域計画は3分類全てを「博物館」の用語内に含むものとします。



② 市立の博物館

ア 水戸市立博物館

市立博物館は、1980（昭和55）年に開館した、自然、歴史、民俗及び美術の4部門からなる総合博物館です。収蔵資料は6万点を超え、水戸市立の博物館では最多の文化財を有しています。

本市の自然、歴史、文化の特性や現状について広く理解できるよう、館の2階は歴史、民俗、3階は自然、美術Ⅰ、4階は美術Ⅱという構成で毎年テーマを変えて常設展を開催しているほか、おおむね年3回の企画展、特別展を開催しています。

イ 水戸市大串貝塚ふれあい公園（埋蔵文化財センター）

大串貝塚ふれあい公園は、1991（平成3）年に開園した、国指定史跡大串貝塚を保存・活用した歴史公園です。園内には『常陸国風土記』に記録のある巨人の像（ダイダラボウ像、高さ15.25メートル）が建ち、常澄地区のシンボルとして親しまれているほか、台座部分は展示施設としても活用されています。

また、園内に埋蔵文化財センターが設置され、本市における埋蔵文化財の調査及び保存・活用の拠点として機能しているほか、センター内の「縄文くらしの四季館」では、市内の主要な考古資料が常設展示され、おおむね年1回企画展を開催しています。

ウ 水戸市内原郷土史義勇軍資料館

内原郷土史義勇軍資料館は、2003（平成15）年に開館した、満蒙開拓に特化した国内唯一の公立博物館です。内原地区の郷土史と満蒙開拓青少年義勇軍に関する資料を収集、展示しています。敷地内には内原訓練所に当時建てられていた独特の形式を持つ宿舍・日輪兵舎が復元されています。

エ 大塚農民館

大塚農民館は、1986（昭和61）年に開館した民俗博物館です。農民の生活を後世に伝えたいという大塚町出身の市民により建設され、同年2月に本市に寄贈されました。館内では農具等の民具を展示しています。

オ くれふしの里古墳公園

くれふしの里古墳公園は、1998（平成10）年に開園した、牛伏古墳群を活用した歴史公園です。園内には16基の古墳群が現存しており、うち4号墳が整備されています。また、はに丸タワー（高さ17.3メートル）は、内原地区のシンボルとして親しまれています。

カ 水戸市平和記念館

平和記念館は、2009（平成21）年に開館した、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝える平和博物館です。館内には水戸空襲による被災状況や戦時中の市民の生活、戦後の復興に向けた水戸のまちについて当時の資料やパネルを用いて展示しています。



水戸市立博物館(大町)

市制施行90周年を記念して創設された総合博物館で、市立中央図書館が併設されています。



埋蔵文化財センター(塩崎町)

市内の埋蔵文化財の発掘調査や出土品の整理・展示、体験教室の開催等を行っています。



内原郷土史義勇軍資料館(内原町)

国内唯一の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所跡地近くに建つ、満蒙開拓に特化した資料館です。



くれふしの里古墳公園(牛伏町)

牛伏古墳群を中心に整備され、楽しく遊びながら古墳について学ぶことができる歴史公園です。



水戸市平和記念館(三の丸)

空襲や戦時中の生活に関する資料やパネルを通して、戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えています。



キ 植物公園

植物公園は、1987（昭和62）年に開園した植物園です。園内にはテラスガーデン、観賞大温室、熱帯果樹温室、植物館、芝生園、ロックガーデン、水戸養命酒薬用ハーブ園等があり、特に植物館では年間を通じて展示会や講座等が開催されています。

ク 水戸城跡二の丸展示館

水戸城跡二の丸展示館は、2012（平成24）年に開館した、第二中学校内に併設された博物館です。日本遺産「近世日本の教育遺産群－学ぶ心・礼節の本源－」を構成する弘道館や偕楽園など、市内の教育遺産や水戸城に関する資料やパネルを展示しています。

ケ 水戸城二の丸角櫓

水戸城二の丸角櫓は、2021（令和3）年にオープンした復元建造物です。角櫓内は展示施設となっており、水戸城の歴史や歴史的建造物の復元整備に関する資料やパネル等を展示しています。

コ 水戸市水道歴史資料室

水戸市水道歴史資料室は、1999（平成11）年に楮川浄水場内（管理本館2階）に開設された資料室です。室内には、市指定文化財である笠原水道絵図をはじめ、本市の水道史に関する資料やパネル等を展示しています。

サ 水戸芸術館

水戸芸術館は、水戸市制100周年を記念し、1990（平成2）年に開館した複合文化施設で、公益財団法人水戸市芸術振興財団が運営しています。

内部には、コンサートホールATM、ACM劇場、現代美術ギャラリーの三つの独立した施設があり、音楽、演劇、美術の3部門がそれぞれに、自主企画による多彩で魅力あふれる事業を展開しています。

また、高さ100メートルの塔（シンボルタワー）をはじめとする磯崎新の設計による独創的な建物は、本市のシンボルであり、文化財的価値を有しています。

③ 私立の博物館（法人等を含む。）

ア 徳川ミュージアム

徳川ミュージアムは、水戸徳川家13代当主徳川圀順が、伝来の大名道具や古文書類を寄贈し、1977（昭和52）年に開館した博物館で、公益財団法人徳川ミュージアムが運営しています。

徳川家康の遺品（駿府御分物）を中心に、水戸藩の歴代藩主やその家族の什宝類や古文書類約6万点が収蔵・展示されています。水戸徳川家に関するまとまった歴史資料が見学できる唯一の博物館です。

イ 藝文ギャラリー

藝文ギャラリーは、1989（平成元）年に常陽郷土会館内に設立した展示室で、公益財団法人常陽藝文センターが運営しています。ギャラリーでは茨城県ゆかりの芸術家の作品世界を紹介する「郷土作家展シリーズ」を年6回企画開催しているほか、ロビーでは展示作家の制作風景や芸術観等を収録した映像を会期中放映しています。



水戸芸術館(五軒町)

音楽、演劇、美術の各分野の専用空間を持ち、本市の芸術活動の拠点であるとともに、世界にその活動を発信する場ともなっています。



藝文ギャラリー(三の丸)

郷土作家の作品を鑑賞できる貴重なギャラリーです。併設する藝文プラザでは絵画や写真等、グループ・個人の発表の場として活用されています。

ウ 常陽史料館

常陽史料館は、1995（平成7）年に開館した博物館で、公益財団法人常陽藝文センターが運営しています。郷土の歴史や芸術文化、金融経済に関する資料を収集しており、館内には、貨幣や銀行に関する資料を常設展示しているほか、企画展示も随時開催しています。

エ 茨城大学地球環境資料展示室

茨城大学地球環境資料展示室は、茨城大学水戸キャンパス内に開設されている展示室で、理学部地球環境科学コースが運営しています。大学開設以来の教育研究を通して収集、調査、収蔵してきた鉱物、岩石、化石標本をはじめとする貴重な地学関係資料が展示されています。

オ 常磐神社義烈館

義烈館は、常磐神社敷地内に1957（昭和32）年に開設された博物館で、宗教法人常磐神社が運営しています。館内には、市指定文化財である陣太鼓しんだいこをはじめ、徳川光圀みつくに、斉昭いひんいぼくの遺品遺墨、家臣の書画等の資料が展示されています。 ※令和7年8月現在休館中

カ 梅酒と酒の資料館 別春館

別春館は、近世から続く酒造である明利酒類株式会社が運営する博物館兼酒蔵です。往年の酒造りの道具類を展示するとともに、梅酒蔵を併設しています。施設は酒蔵を改造したもので、施設本体も文化財的価値を有しています。



3 歴史的背景

(1) 原始（旧石器時代～古墳時代）

① 旧石器時代

日本列島で人類が活動したと確認されるようになるのは約3万年前で、この年代の遺跡は列島の各地で発見されています。本市及びその周辺地域（以下「水戸地域」という。）でも十萬原遺跡（^{じゅうまんばら いせき} 藤が原）から約3万年前の石器集中地点が検出されており、この時期から水戸における人類の時代が始まったことが分かります。一方、旧石器時代の考古資料の検出を目的にしない発掘調査が多いことから、市内の旧石器時代資料（縄文時代草創期（約1万6,500年前～1万1,500年前）を含む。）の大半は単独出土資料、後世の混入資料、表面採集資料等にとどまり、住まいや狩場など、当時の生活をうかがう資料が乏しいのが現状です。

② 縄文時代

水戸地域において土地利用が活発化するのには縄文時代からです。縄文時代早期（約1万1,500年前～7,000年前）の遺跡はそれほど多くありませんが、馬場尻遺跡（^{ばばじり いせき} 飯富町）から約9,000年前の土器が出土しており、早期から水戸に人々が定住していたことが判明しています。

縄文時代前期（約7,000年前～5,470年前）に縄文海進がはじまると、海岸線が千波湖周辺にまで及ぶようになり、柳崎貝塚（^{や た かいづか} 千波町）、谷田貝塚（^{や た かいづか} 谷田町）等の貝塚が形成されます。前期の代表的遺跡としては大串貝塚（塩崎町）があります。同貝塚は県内屈指の前期貝塚であるとともに養老年間（717～724年）に成立した『常陸国風土記』に記録が残されており、世界で最も古く記録された先史時代の遺跡であることでも知られています。

縄文時代中期（約5,470年前～4,420年前）になると、遺跡の数が増大するとともに、下畑遺跡（^{したばたけ いせき} 元石川町）、坏遺跡（^{あぐつ いせき} 河和田町）、渡里町遺跡（^{わた り ちょう いせき} 渡里町）等で大規模な集落跡が確認されるなど、集落の規模が広がっていきました。

縄文時代後期から晩期（約4,420～2,350年前）になると遺跡の数が少なくなり、土地利用の様相は不透明になりますが、金洗沢遺跡（^{かねあらいざわ いせき} 全隈町）に見られるような精巧な土器や信仰のために使われた土偶、土版（^{どぐう} 土版）が出土しています。出土土器には東北地方に分布する資料も相当数認められ、関東地方の文化と東北地方の文化の中間地域としての特色がうかがえます。

③ 弥生時代

弥生時代の最大の特色は、農耕の開始です。人々のライフスタイルが一変し、都市や国家の形成、そして戦争につながっていきました。

水戸地域でも那珂川流域の台地上を中心に弥生時代の遺跡や遺物が確認され、本市の歴史文化の特徴の一つである農耕社会が到来しました（→83ページ）。

弥生時代後期後半（紀元200年前後）になると、薬王院東遺跡（^{やくおういんがし いせき} 元吉田町）や見川塚畑遺跡（^{み がわつかはた いせき} 見川町）等で大きな集落が営まれるようになります。

この時期の水戸地域は、十王台式土器（^{じゅうおうだいしき} 土器）と呼ばれる地域色の濃い土器が中心となり、独自の文化圏を形成していました。

弥生時代の終わりから古墳時代のはじめにかけては、大鋸町遺跡（^{お が まち いせき} 元吉田町）や大塚新地（^{おおつかあらじ}）



十萬原遺跡出土石器(埋蔵文化財センター所蔵)

十萬原遺跡で出土した3万年前の旧石器です。水戸の人類の足跡を示す最も古い物証です。



大串貝塚出土遺物

(埋蔵文化財センター所蔵／市指定考古資料)

大串貝塚で出土した土器や貝製品・骨角製品こつかくです。貝塚のある縄文集落における漁撈・狩猟きょりょうの暮らしぶりを示す貴重な遺物です。



水戸台地出土弥生・古墳時代折衷土器群

(埋蔵文化財センター所蔵／市指定考古資料)

左が大鋸町遺跡、右が大塚新地遺跡出土土器です。弥生時代と古墳時代の様式を折衷した性格を持ち、弥生時代から古墳時代への移行期を示す貴重な資料です。

遺跡いせき（大塚町）において、十王台式土器と古墳時代の土師器の特徴が折衷した土器が出土しており、次第に古墳文化に移行していく様子が判明しています。

④ 古墳時代

古墳時代になると、ヤマト政権の支配が水戸地域にも及ぶようになり、支配者の墳墓である古墳が築造されるようになりました。

古墳時代前期（3世紀中頃～4世紀）の古墳としては、二にの沢B遺跡いせき（藤井町）で検出された前方後方形の周溝墓しゅうこうぼや、安土星古墳群第1号墳あどほしこふんぐんたい（飯富町、前方後方墳ごうふん）があります。これらの周溝墓や古墳は那珂川流域でも最初期に造営されたもので、早い時期から水戸地域において古墳文化が開始したことがうかがえます。

古墳時代中期（5世紀）の古墳としては、那珂川右岸の台地上に立地する愛宕山古墳あたごやまこふん（愛宕町）が挙げられます。同古墳は全長136メートルの前方後円墳（全長は県内3番目）で、造営時期は5世紀前半と考えられています。周辺地域にこれほどの規模を持つ古墳はなく、



当該時期にヤマト政権との密接な関係を持ち、強大な権力を保持した在地首長が市域に存在していたことを示すものとして注目されます。

古墳時代後期（6世紀）になると、古墳も多数築造されるようになります。このうち発掘調査によって具体的な様相が報告されている主な事例としては、^{きたの や しき こ ふん}北屋敷古墳（大串町、6世紀後半）、牛伏古墳群（牛伏町・黒磯町、4世紀後半～6世紀後半）、ニガサワ古墳群（藤井町、6世紀後半～7世紀前葉）があり、水戸地域の各地に大小の在地首長が存在し、古墳や集落が営まれたことが判明しています。



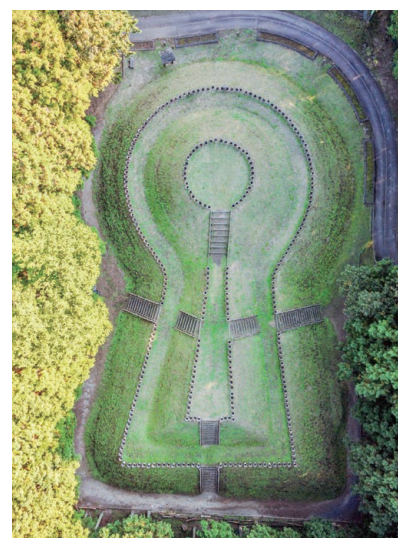
愛宕山古墳
(愛宕町／国指定史跡)

墳丘全長140mを有する、県内を代表する中期の古墳です。地域社会の支配者として君臨した首長の墳墓と考えられます。



吉田古墳(元吉田町／国指定史跡)

古墳時代終末期の多角形墳(八角形墳)です。墳丘内部の石室には線刻壁画が描かれています。線刻を持つ多角形墳は全国唯一です。



牛伏4号墳(牛伏町外)

古墳時代後期に造営された全長52mの前方後円墳です。地域の中で中程度の首長の墳墓と見られます。



(2) 古代（飛鳥時代～平安時代）

① 飛鳥時代（古墳時代終末期）～奈良時代

那珂川右岸の台地平坦部に造られた吉田古墳（元吉田町）は、横穴式石室の奥壁に線刻で武具等が描かれた装飾古墳です。造営時期は7世紀中葉と推定されています。墳形は多角形墳（八角形墳）で、大陸文化と関わりのある有力首長の墳墓と考えられています。

古代は、全国で国・郡（評）・里（郷）の地方制度が整えられました。水戸地域は常陸国となり、那賀評（のち那賀郡）に属しました。各郡には郡家（郡衙）が置かれ、那賀郡家は台渡里官衙遺跡群（渡里町）周辺に置かれたと推定されています。発掘調査の結果では、7世紀第4四半期に郡家に附属する寺院である郡寺の造営が開始されたことが確認されており、那賀郡家の組織化が行われたと考えられています。

また、台渡里官衙遺跡群から見て那珂川の対岸にある田谷遺跡（田谷町）からも古代瓦が出土しており、周辺に古代の駅である河内駅家があったと考えられています。

さらに、那珂川と洵沼川の合流点に面する標高約5メートルの低湿地帯に、平津駅家（平戸町）が設置されていたことが『常陸国風土記』に記されているほか、平戸町から約1.7キロメートル北西の台地上にある大串遺跡（大串町）からは、那賀郡家正倉別院と考えられる大型掘立柱建物跡や穀物を収めた倉庫である正倉跡が検出されるなど、市内各所で官衙関連の遺構・遺物が検出されています。

② 平安時代

9世紀に至り、律令体制による朝廷の支配が衰えていく中で、812（弘仁3）年、河内駅家が廃止され、9世紀後半には那賀郡家も廃絶したと考えられています。

9世紀から10世紀に至る間に、常陸第三宮である吉田神社（宮内町）が次第に勢力を持ち、10世紀前半には私称の郡である吉田郡が形成され、那賀郡から独立するほどの政治的・宗教的勢力となります。こうして吉田神社は、別院である吉田薬王院とともに那珂川流域における新興勢力として勢力を拡大していきます。

935（承平5）年から940（天慶3）年にわたって起きた平将門の乱は、朝廷を混乱させる出来事であった一方、常陸地方の武士が成長していく契機となりました。乱鎮圧に加わった平繁盛の子孫である常陸平氏がその勢力を伸ばし、一族の吉田氏と石川氏が水戸を中心とした吉田・那賀両郡に勢力を拡大していきました。

12世紀前半までには吉田氏が郡司となり、在庁官人（地方官僚）として吉田郡を勢力下に置き、吉田神社と対抗しながら中世を迎えます。

(3) 中世（鎌倉時代～安土桃山時代）

① 鎌倉時代

平安時代末～鎌倉時代初期に水戸地方を勢力下に置いた武士団が、常陸平氏一族で石川次郎家幹の次男・馬場小次郎資幹です。資幹は御家人として鎌倉幕府に仕えたとともに、国を治める役職である大掾職を継承し、常陸平氏一族の長である惣領となりました（以下「大掾氏」という。）



台渡里官衙遺跡群(渡里町／国指定史跡)

那賀郡家跡です。南から南方地区、観音堂山地区、長者山地区とエリア分けしています。南方地区・観音堂山地区は郡寺の跡、長者山地区は正倉の跡です。正庁跡はまだ発見されていません。



大串遺跡(大串町)

大串遺跡には、那賀郡家(台渡里官衙遺跡群)とは別の場所に租税(穀物)を納めた役所の跡(那賀郡衙正倉別院)があったと考えられています。

吉田神社(宮内町)

おおいじんじや ふじうちじんじや
大井神社・藤内神社とともに、市内で最古の由緒を持ち、格式の
高い神社です。やまとたける
日本武尊を祭神としています。





資幹は上市台地の先端に城館（馬場館）を構え、水戸地域支配の拠点とします。これが現在の水戸城（三の丸）です。大掾氏は常陸国府である府中（石岡市）を本拠としていたことから、支配域北部の拠点として水戸城を位置付けるとともに、南部の拠点として府中を位置付け、水戸・府中を中核として支配を実現していたと考えられます。

さらに、資幹の子らはそれぞれ水戸及びその周辺地域（青柳、袴塚、見川、枝川、八辻、河和田、宇木等）に根を下ろし、水戸地域の支配を強化していきました。

② 南北朝時代～室町時代

南北朝の動乱は常陸にも波及し、大掾氏は南朝方として争乱のただ中にありました。その中で常陸守護の佐竹氏は北朝に味方して着々と領土を拡大し、14世紀中頃には水戸地区の南北を佐竹勢力が挟むほどになり、次第に大掾氏の勢力が弱まっていきます。

そしてこの時期、那珂東郡江戸郷（那珂市下江戸）の土豪である那珂通泰の子通高が江戸氏を名乗り、佐竹氏配下となっていました。江戸氏は1387（至徳4・元中4）年の難台山城の戦いで軍功を挙げ、鎌倉公方の足利氏満は大掾氏旧領の河和田、鯉淵及び赤尾関の地を通高の子である通景に与えました。通景は河和田城を本拠とし、さらに領土を拡大して中妻三十三郷と呼ばれる広大な領域を手中に収めます。また佐竹氏家中にあっても小野崎氏、小貫氏らとともに宿老（重臣）の地位を獲得するほどになりました。

1426（応永33）年頃、通景の子通房は大掾満幹が城主となっていた水戸城を急襲し、これを奪取しました。これによって大掾氏は水戸領域の支配権を失い、江戸氏が水戸城を居城として勢力を拡大していきます。

江戸氏の領域は時代によって変動はありますが、現在の水戸市、大洗町、ひたちなか市及び茨城町の大部分と、那珂市、笠間市及び小美玉市の一部を支配し、常陸有数の武家にまで勢力を伸ばしました。水戸市では国田地区及び飯富地区の一部は佐竹領でしたが、他は全て江戸領であったと考えられています。

江戸氏が水戸地域の支配を固めた15世紀後半は、水戸が都市として成立した時期でもあります。この頃までには、常陸を南北に貫く主要道である鎌倉街道下道が水戸の地で那珂川と交差しており、那珂川流域に進出した江戸氏によって水陸交通の結節点となる水戸の地が城下として整備されました。水戸は、中世常陸の主要道と主要河川が交わる交通の要衝に形成された都市だったのです。

③ 安土・桃山時代

1590（天正18）年、豊臣秀吉が小田原城を攻め、北条氏を滅ぼすと、水戸地域を含む常陸の勢力図が大きく変化しました。佐竹義宣は小田原城攻めにいち早く参陣し、秀吉に従いましたが、江戸重通は服従しなかったため、秀吉は佐竹氏に江戸領の支配を認めました。

翌年、義宣は水戸城を攻めて江戸氏を追放し、周辺の支城も次々と落城させたとされています。こうして7代160年に及んだ江戸氏の水戸地域支配は終わり、代わって佐竹氏が水戸地域を支配することとなりました。

1591（天正19）年、義宣は居城を太田城（常陸太田市）から水戸城に移します。義宣は常陸54万5,800石を領する国内有数の大名となったことから、関東平野に面し、水陸交通



の要衝である水戸城を拠点としたほうが政務を行う上で有益と判断したと考えられます。

義宣は1592（文禄元）年には城内鎮守として八幡宮（移転を経て現在は八幡町）を創設、1593（文禄2）年からは水戸城及び城下町の大改修を実施するなど、大規模な普請・作事（土木工事）を行います。こうして義宣の時代に、現在の本市中心市街地の祖型が形成されていきました。



河和田城
（河和田町／市認定地域文化財（史跡））

江戸氏が水戸に進出した時、はじめて居城とした城です。居城を水戸城に移してからは重臣の春秋氏が城主に置られました。



江戸氏時代の水戸城

江戸氏が水戸城主だった時代は、内城（現在の水戸第一高等学校の校舎部分）と宿城（現在の水戸第三高等学校、茨城大学附属小学校、第二中学校）の二つの曲輪（区画）で構成されていました。